



賀川豊彦の「乳と蜜の流るゝ郷」 (その4)

1934(昭和9)年『家の光』5月号
教え導く者としての「新見栄一」が話題となる

1934(昭和9)年『家の光』6月号
東助、高円寺消費組合で働き始める



監修 堀越芳昭
山梨学院大学 元教授

上田で事件に巻き込まれた東助は、消費組合研究のため東京にむけて歩いた。初日は小諸の眼科医院の母子に食事等を世話になる。二人との会話のなかで「新見栄一^{にいみえいち}」が出てくる。これは賀川が、小説中に自分自身を仮託した名前であることを押さえない。今回以外にも新見栄一は登場する。

眼科医院の娘の援助もあり、汽車で東京に向かう。東京に着いた東助は、高円寺消費組合で、働きはじめる。

■ 教え導く者としての「新見栄一」

鶴家のお竹に養子になることを正式に断った東助は鶴家を出ていくが、「もう少し話がしたい」という春駒もついていく。ところが二人の前に上田の遊廊荒らしで有名な不良青年真田益吉が現れ、春駒に短刀を突き付ける。東助は短刀を取り上げるが喧嘩となり、巡査が駆け付け、二人を警察に連行する。真田はすぐ解放されたが、東助は3日後に解放された。春駒が拐帯されたことが新聞で取り上げられ、兄の彦吉はもちろん、藤井亭の主人夫妻までが東助を悪者扱いした。

上田付近にいない方がいいと思った東助は、東京へ出て消費組合を研究しようと決意し、藤井亭をでる。旅費がないため浮浪者になったつもりで徒歩で東京を目指す。小諸まで来て夜となり、教会を訪ねようとしたとき、親切な娘に会い、眼科医院の自宅に案内してもらい、食事の世話になる。

食事がすむと、娘の母は、患者待合室になっている玄関に、お茶とお菓子を出してくれた。(略)東助は少しもかくさないで、きょうまで彼が踏んで

きた道を話した。

すると彼女は、

「そうですか、あなたも消費組合を研究なさろうと思っ
ていられるんですか。わたしの甥もね、東京本所の江東消費組合
っていうところへ、消費組合の研究に行っているんですの。新見
栄一さんが経営している江東消費組合っていうのは、ずいぶん
成績がいいんですってね。あそこには質庫信用組合というものも
ありましてね。上田にいらしたのなら、上田の質庫信用組合もご
らんになったでしょう」

そんな話をしていると、診察室の電灯の下に、毛糸細工を持
ってきた娘が、母と東助の会話に言葉をさしはさんだ。

「おかあさん、新見栄一さんは、近ごろ、医療組合っていう
のも、お興しになったんだわね」

そう言うと、母は笑いながら、東助に言った。

「そうそう、新見さんは、日本全国の医者のない村に、産
業組合で医者を入れようという計画をおたてになりましてね、
ずいぶん激しい医師会の圧迫をもともなさらないで、医療組
合をおつくりになりましたんですよ」

この短いやり取りのなかに新見栄一の名が3度も出てくる。「
新見栄一」は、賀川の代表作でその前半生の自伝的小説といわ
れる『死線を越えて』の主人公の名であり、賀川が小説中に自
分自身を仮託した人物に対して常に用いる名前である。『乳と
蜜の流るゝ郷』においても「新見栄一」が散見される。つまり、
この小説における「具体的な情報は、主人公の東助の目線を通
して語られ示されることが中心となるが、その際に、教え導く
先導役として「新見栄一」の存在が機能する場面が多くみら
れる」(河内聡子氏)のである。今後も新見栄一が登場する場
面があるので、折々に紹介したい。

翌朝、感謝の言葉を述べて眼科医院を出ようとする東助に、
娘は1円札3枚を



大正時代のベストセラーとなった『死線を越えて』は、小説だけではなく、劇画や映画などにもなっている

出し受け取れと勧め、東助は感激して、目に涙を浮かべながらそれを受け取り東京へ向かう。

■ 高円寺消費組合で働き始める

小諸から汽車で東京に着いた東助は、一緒に汽車に乗っていた『鳥打ち帽の留』に高円寺に消費組合があることを聞いた。

鳥打ち帽の留は、高円寺の消費組合の位置を、アスファルト道路の上に線を引いて、詳しく教えてくれた。そして最後に言った。

「あそこへ行くのもいいが、高等刑事がいつもついているぞ。とっつかまらないようにしろよ。わはは……」(略)

高円寺駅でおりて、『鳥打ち帽の留』に教えられたとおり高円寺消費組合を尋ねていったが、それは想像以上に小さい店舗式の消費組合であった。

「——なんだ、こんなちっぽけな組合なのか、あきれてしまうなあ。日比谷の角に建っていた大きなデパートに比べて、なんという、みすぼらしい消費組合だろう。東京の消費組合にも似合わないじゃないか——」

そんなことを考えながら、彼は、表のガラス戸を開いて、中にはいった。

「こんにちは、お寒うございます」と帳場の男に声をかけたが、相手にされなかった。こうした事態を大きく変えたのが、次のような出来事であった。

配達夫が帰ってきた。尻にバスケットをくっつけた自転車を、街路の上に突き立たせて、勢いよくガラス戸をあけた。

「おい、また西沢がやられよったぞ、ミシン屋の前に、荷物も何もそっくりほったらかしてあるよ。どうしようなあ」

軍手を取りはずしながら、コールテンの服を着た賢そうな、背の高い青年が、余念なく計算を続けている組合の書記に言った。

「ちえっ、またか、商売にならんなあ、それじゃあ……じゃあきみ、その荷物をいったん店まで持って帰ってくれんか。おれが昼から配給するから」(略)

いちばん早く表から帰ってきた男は、昼飯に帰った六人の配給人を二階に集めた。そして何か小声で相談していたが、すぐ、最初、表から帰ってきた青年が、二階からおりてきて東助に言った。

「きみは、配給でもなんでもいいでしょうね？ きみは自転車に乗れるでしょうね」



東助が軽くうなずくと、その青年は明確に言った。

「じゃあ、きみ、きょうからでもすぐ、配給に出てくれますか？ 最初二、三日はまごつくでしょうが、あとはすぐなれますよ。しかし、うちの組合は貧乏ですからね、食費のほかに、ふろ賃ぐらいしか出ませんから、そのつもりで働いてください」

東助は飛び上がるほどうれしかった。彼はさっそく昼飯を食わしてもらって、田舎から着てきた印ばんてんそのまま、検束された西沢のあとを引き受けて、配給に回るようになった。

こうして東助は、高円寺消費組合で働きだしたのである。だが、この先も東助の苦労は絶えないのだった。次回は東助の奮闘する姿を追っていく。

<参考文献>

・『家の光』(昭和9年5月号、6月号)

＊文章の引用部分は復刻版『乳と蜜の流るゝ郷』(2009年)を参考にした。

・河内聡子『雲の柱 第32号』「理想郷としての『乳と蜜の流るゝ郷』—産業組合の理論を越えて」(賀川豊彦記念松沢資料館、2018年)